

地球環境研究分野(総合)

委員会からの主要意見

現状についての評価・質問等

- 第三期中期計画の中核年として世界をリードする申し分のない成果を上げている。[年度]
- IPCC 第5次評価報告書への貢献、質の高い論文発表などにより一定の国際的評価を得ている。[年度・見込み]
- 予算規模も格段に大きいことを踏まえれば、国民への説明責任も大きくなるが、実際の国民へのアピール度はやや不足気味ではないか。[年度]

今後への期待など

- 緻密で広範、かつ継続的なモニタリング事業は、本分野の研究の不確実性を減らすことに役立っているので、引き続き実施して欲しい。[年度]
- 将来の人材育成及び広報を担当する職員、研究系職員の確保といった人材拡大に向け、いっそう努力して欲しい。[年度]
- 観測研究、リスク評価、対応策評価の連携をさらに進めてほしい。[見込み]
- 第4期における地球環境研究の新展開を目指して、この分野における新たな研究課題設定や研究分野の提案など、従来とは違った切り口による新しい地球環境研究像の提案を通じて、世界的なプレゼンスの一層の向上のための取り組みに期待したい。[見込み]

主要意見に対する国環研の考え方

- ①地球温暖化やオゾン層の破壊といった地球環境問題に関する科学的な成果について世界的にも貢献できたと考えています。一方では、国民や政策的なアピールに関してはこれまで以上にプログラム内でも議論や検討が必要であると考えています。[年度]
- ②アジア、太平洋を中心に行っている継続的なモニタリングは世界的な精度管理活動を含め行ってきており、今後とも重要です。事業の継続のためには契約職員を含めた人材の確保と広報担当や研究担当職員の拡充が重要であると考えられます。[年度]
- ③プログラム内での連携については、国民や政策的アピールと関連して検討する必要があると考えています。特に、炭素循環の観測・モデル連携、リスク・対策のシナリオ研究連携など有意義なプロジェクト間連携テーマも見出しており、これらの連携の強みをより一層活かしていきます。[見込み]
- ④地球環境研究分野としては、気候変動に関しても新たな切り口での研究課題設定や、新しい方法論の検討などを通して世界的にも研究をリードする必要があると考えています。[見込み]